

『#ババヤガの夜』（王谷晶著）を読んでみた。著者は2012年、『猛獣使いと王子様』でデビュー。2025年、本作の英訳版“*The Night of Baba Yaga*”により英国推理作家協会賞（ダガー賞）の翻訳部門を受賞した。

この作品は、暴力団の会長の娘の護衛を任された、暴力を趣味とする女性Sの物語で、過激なアクションシーンや迫力ある描写が特徴の「シスター・バイオレンスアクション」と評されている。

女性が暴力の権化と化しているのがすごい。武道は作法があるから習わない。なんでもいから相手をのしてしまえばいいという祖父の教えに従って生きている。至る所で、男たち（迫害者）の手足が切断され、男性性器が切り取られる場面が出現する。男性に迫害されている女性なら拍手喝采であろう。最後、追手から逃げる40年も、小説ならではの工夫がなされている。息もつけない怒涛の時間であった。社会の柵に抑圧感を持つ者が読めば、スカッとすかもしれない。タイトルの「ババヤガ」とは、東南アジアのどこかであり、そこで物語が展開するのかと思っていたら、大外れ。本作は、このババヤガ（魔女）の象徴性が女性の自立や抑圧からの解放といったテーマに重ねられていると評論家は評価している。

「ババヤガ（Baba Yaga）」とは、スラヴ民話に登場する伝説的な魔女の名前だそうだ。ロシアや東欧の昔話に頻繁に登場し、善悪両面を持つ複雑なキャラクターである。

ババヤガの特徴

- ・ 森に住む老婆の魔女で、鶏の足の上に建つ奇妙な小屋に住んでいる
- ・ 臼に乗って空を飛び、ほうきで飛行の跡を消すという独特の移動方法を持つ
- ・ 子どもを食べる恐ろしい存在として描かれることもあれば、主人公を助ける賢者として登場することもある
- ・ 礼儀正しさや魂の清らかさを試す存在として、物語の試練の象徴になることが多い

民話での役割

- ・ たいていは敵役として登場し、主人公に試練を与えるが、主人公が誠実であれば助言や魔法の道具を与える善玉として振る舞うこともある

- 「鷹フィニストの羽根」などでは三人のババヤガが登場することもあり、物語の奥行きを深めている

神話的背景

- 元々は冬の神格化された存在で、スラヴ神話における自然の脅威を象徴していた
- キリスト教の普及に伴い、古代の神々が魔女や妖怪に置き換えられた結果、ババヤガは恐ろしい魔女像として定着した

ダガー賞 (Crime Writers' Association Dagger Awards) は、英国推理作家協会 (CWA) が主催する、世界的に権威のあるミステリー文学賞である。英語圏で出版された作品が対象。翻訳部門は 2006 年に新設され、英語以外の言語で書かれた作品の英訳版が対象。米国のエドガー賞と並び称されるほどの名誉ある賞で、1955 年に創設された。

ダガー賞とは

- ゴールド・ダガー賞 (最優秀長編推理小説)
- スティール・ダガー賞 (スリラー部門)
- インターナショナル・ダガー賞 (翻訳小説部門) などで構成されている

これまでの日本人作家の最終候補

横山秀夫：『64 (ロクヨン) 』 (2016 年)

東野圭吾：『新参者』 (2019 年)

伊坂幸太郎：『マリアビートル (Bullet Train) 』： (2022 年)

柚木麻子：『BUTTER』 (2025 年)